

人工内耳「スイッチオン」の開催

2021年8月4日、後天的に聴力を失った16歳のサルギス君への人工内耳の「スイッチオン」(音入れ)が、エレバン市内のエレブニ病院にて開催されました。サルギス君は本年7月にアルメニアを訪問した石山明 UCLA 医学部教授により、耳の後ろと内耳にインプラント(電極)を埋め込む手術を受けており、手術から1ヶ月後となる同日が音入れを行う日でした。始めサルギス君は緊張している面持ちでしたが、次第に笑顔を浮かべながら音の世界を楽しむ始めました。

本式典には福島正則在アルメニア日本国大使の他、アルチョン・シンバチャン保健省次官、アルトゥール・シュキュリャン・エレブニ病院耳鼻咽喉頭科部長、マイケル・プロトコースキー在アルメニア米国大使館医務職員、サルピィ・アカラギャン・アルメニア国際医療基金会会長兼創設者等が出席しました。

日本政府は草の根・人間の安全保障無償資金協力の枠組みを通して、アルメニアの子どもたちの聴覚障害への取組に貢献してきました。平成21年度「エレバン市聴覚障害検査及び教育向上計画」及び平成29年度「アルメニア聴覚障害検査機器整備計画」において、アルメニア各地の診療所に聴覚検査機器を整備し、新生児の聴覚障害の早期発見を可能とすることで、聴覚障害児の障害を軽減させ、聴覚障害者の社会参加の促進を支援しています。



スイッチオン開始



聴覚テストを楽しむサルギス君



石山先生がアルメニアで最初に治療した子どもたちの1人である、アルチュム君(19歳)がサルギス君を祝福する様子



インタビューを受ける福島大使